
魔法少女リリカルなのは ～大空と大地～

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～大空と大地～

【Nコード】

N0993Z

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

神様に間違つて殺された少年はREBORNの力をもらってリリカルなのはの世界に転生した。さあ、原作ブレイク、って住んでる所ミッド！？ブレイクできないじゃん！？主人公は準チートです。それでもよろしければ見てください

プロローグ

「……………」

俺は真っ白な空間に立っていた

「……此处、どこ？」

俺は訳が分からなかった

「確か俺は、REBORNを読んでいたんだよな。つで、急に目眩がして……さっぱり解らん」

「あゝ」

「うん？」

俺が記憶を思い出していると、後ろから声を掛けられた。振り向くと、そこには聖闘士セイヤに出てくるサーシャさんそっくりな人がいた

「どちら様ですか？」

「あ、すみません。私はアテナと言います」

「マジですか!?(何でこんなにそっくりなの!?)」

「それで、．．すいませんでした!!」

アテナ様が俺に頭を下げた

「謝れる理由が解らないんですが」

「実はですね、貴方は死んでしまったんです」

「な、何だと．．．」

「私の部下が、間違つて貴方の書類にハンコを押してしまつて．．
」

「それで、死んじゃつたと」

「．．．はい」

「．．．それで、俺はこのまま天国にGOなんですか？」

「．．．怒らないんですか？」

「貴方に怒つた所で俺が生き返るわけじゃないですからね」

「そうですか。それで、先程の答えですが。貴方には他の世界で
新たな命で生きてもらいます」

「ほうほう」

「行先は『リリカルなのは』の世界です」

「ちよつて待て！！リリカルなのはってアニメですよね！？」

俺はアテナ様の言葉に待ったをかけた

「貴方は平行世界って知ってますか？」

「ええ、知ってますけど。それが……ああ、成程」

俺は理解し手を叩いた

「つまり、俺の世界ではアニメでも平行世界では現実としてある。そう言うことですね」

「はい、その通りです。それで、お詫びとして、4つまで貴方に力を与えます。何がいいですか？」

「ふゝゝむ」

俺は考え始めた

「じゃあ、REBORNの『大空』、『大地』の炎。ツナの『超直感』。ナツツ、正し、ボックス兵器じゃなくて、キャラのフリード見たいな感じ。後はデバイスかな」

「……………」

「どうしたんですか、ハトが豆鉄砲を喰らったような顔をして？」

「い、いえ。他のひとは仮面ライダーの変身ツールだとか、王の

財宝などを頼んでいたものですから」

「あく成程。俺は努力して力を得るタイプなんで。まあ、超直感
はチートだけど」

「解りました。デバイスと使役獣にかんしては後でお送りします」

「はい、ありがとうございます」

「では、貴方の歩む道に幸のあらんことを」

アテナ様がそう言うと、俺の意識が再び途切れた。そして

「おぎゃああああ（・・・解ってはいたけど。まさか、また赤ん
坊からとはな）」

こうして、俺の新たな人生が始まった

第1話

仁 s i d e

どうも、火群仁です。なのはの世界に転生してから、早10年、早いもんだね。まあ、俺のいる所が海鳴市でなく、ミッドだったのは驚いたが、更に驚いたのが、父さんと母さんの容姿がREBORNのツナと京子で、しかも名前まで同じきたからさあ大変

「ガオ！」

「おっと、サンキューナッツ。お蔭で、ぶつからずに済んだ」

「ガウ♪」

俺は肩に乗っている、相棒のナッツに礼を言った。ナッツと会ったのは6年前、家の庭の隅で丸まって寝ているのを見つけ、そのまま飼うことになった

「そう言えば、父さんが今日渡したいものがあるって言ってたけど、何だろうな」

「ガウ？」

「ナッツに聞いても解らねえか。まあ、楽しみにしてようぜ」

「ガウ♪」

そして、その夜

「仁、こっちに来てくれないか？」

「うん」

俺は父さんに呼ばれ、リビングに降りてきた

「あれ、母さんは？」

「お風呂だ」

「あ、成程」

「仁、今朝言ったこと覚えてるか？渡したいものがあるって」

「うん」

「これを、お前に渡す」

父さんは俺に小さな箱をくれた

「……これは？」

「開ければわかるよ」

そう言われ、俺は箱を開けた。開けるとそこにはリングが入っていた

「父さん、これって・・・」

「うん、仁のデバイスだよ。仁は魔法と格闘の基礎が出来てきたからね、そろそろ渡してもいいと思ってね」

「俺の・・・デバイス」

「起動させてご覧」

「う、うん」

俺は箱からリングを取りだし、指にはめた。そして、魔法陣を展開した

「マスター認証、火群仁。術式は近代ベルカ。正式名称『レグルス』」

『認証確認、よろしく頼むぜ旦那』

「だ、旦那!？」

俺はレグルスの発言に驚いた

「レグルス、これから仁の事をよろしく頼む」

『まかせて下せえ、親方』

その後、俺は父さんにレグルの性能を聞き、明日稽古をつけてくれると約束したので、興奮しながらベッドに向かった

第2話

仁 s i d e

レグルスを貰った次の日、俺は父さんと、家の地下にある練習場
にきていた

「さて、準備はいいかい、仁？」

「勿論」

「じゃあ、始めよう。レオーネ、セットアップ!!」

『S e t u p
』

父さんはグローブを装着しバリアジャケットを身に纏った（ボ
ンゴレ？世そのまんま）

「俺達も行くぞ、レグルス」

『あいよ、旦那』

「セットアップ!!」

『装着』

俺は籠手型のアームデバイスを装備し、バリアジャケットを身

に纏った

「あれ？右手の甲と左手の甲のマークが違うな」

俺が不思議に思っていると

『旦那、左手の甲のマークが違うのは、こっちの方にあるものが装備されているからだぜ』

「あるもの？」

『おうよ、左手の籠手は旦那のレアスキルの一つ、『重力』を操作できるようになってるのさ』

「へえ〜」

「仁、そろそろいいかい？」

「あ、うん」

父さんに言われ、俺は返事をした

「仁は魔法と格闘の基礎はもうできてるからね。足りないのは戦闘経験。だから、これから軽い模擬戦をやるよ。ルールは簡単、俺に一発でも当てることが出来れば仁の勝ち。そして、15分間攻撃に当たらなければ俺の勝ち。いいかい？」

「はい」

「じゃあ、始めよう」

そう言つと、父さんの雰囲気が変わつた

仁 s i d e e n d

3人称 s i d e

「……………」

仁は綱吉から放たれるオーラに冷や汗を流した。そして、

『S o n i c m o v e 』

綱吉の姿が消えた

「っ!!」

仁は反射的にしゃがむと、橙色の魔力を纏つた手刀が空を切つた。そして、仁は直ぐにその場から離れた

「いい反応だね」

綱吉は笑顔で言つた

「……父さん、今のアレを喰らつたら、絶対に首がおれたと思うんだけど」

「大丈夫、ちゃんと加減はしているから」

「（・・・あれで、加減してるって、本当かよ？）レグルス！
」

『S o n i c m o v e』

仁は綱吉から最初に習った高速移動で綱吉の左脇に移動した

「はあっ！！」

そして、魔力の纏った右拳を叩き込んだ

「・・・」

綱吉はそれを、木の葉が落ちるような動きでかわし、掌底を仁に打ち込んだ

「があっ！！」

仁は吹き飛んだが、直ぐに受け身を取り、衝撃をいなすと、再び綱吉に突っ込んだ

「はあああああっ！！」

「がむしゃらに突っ込んでも意味は無いよ」

そして、綱吉は回し蹴りを仁に繰り出したが

『Sonic move』

当たる直前に高速移動を使い、後ろに回り込んだ

「はあああああっ！！」

「甘い！！」

綱吉は振り向きながら裏拳を仁に繰り出した。だが、

『Sonic move』

仁は再び高速移動を使い、綱吉の後ろに回り込んだ

「貰ったー！！」

そして、炎を纏った拳を打ち込んだ。当たった瞬間、纏っていた炎が爆発し、黒煙が舞った。煙が晴れると、そこには仁の拳を止めている綱吉がいた

「うそー！？」

仁はショックを受けた。完璧に防御できない体勢に打ち込んだのだから、ショックも大きい。仁は直ぐに綱吉との距離を取った。しかし、綱吉は構えを解き、笑顔だった

「・・・父さん？」

「この勝負、仁の勝ちだよ。ほら」

綱吉はマントの一部を仁に見せた、よく見ると、焼かれた跡があった

「一撃を与えたら勝ちって言ったけど、誰も体には言っていないからね」

「や、や、やったー」

仁はジャンプをしながらガッツポーズをした

「それにしても、最後の動きは良かったよ。当たる直前に高速移動で後ろに回り込み、追撃がきた瞬間、また後ろに移動し、防御できない体制の相手に攻撃する。どんなに強い魔道士や騎士でもまず反応できないね」

「でも、父さんは反応出来たよね？」

「うん。仁も知ってると思うけど、俺もレアスキル『超直感』があるからね。ギリギリで反応が出来たんだよ。仁も俺の攻撃を超直感で感じ取ったんだろう？」

「う、うん」

「でも、例え来るって解っても、体が着いて行けなきゃどうしようもないけどね。さあ、上に上がって、朝ご飯を食べよう、京子が待ってるはずだからね」

「はい」

そして、その日の夜、家のチャイムが鳴った

「あれ、誰だろう？」

「母さん、俺が出てくるよ」

そう言い、仁は玄関に向かった

「どちら様ですか？」

「仁君？クイントだけど」

「クイントさん？今開けますね」

仁が開けると、隣の家に住んでいる、ゲンヤさんとクイントさん、そして見慣れない二人の女の子がいた

「え〜と（誰だ、この二人？）」

「仁？誰がきたのって、クイントさんにゲンヤさん。こんばんは」

仁が戻ってこないの、綱吉と京子が玄関にやってきた

「こんばんは京子ちゃん、綱吉君。今日は火群家に私達の娘を紹介に来たの。GINGA、スバル挨拶しなさい」

「は、初めまして、GINGA・ナカジマです。よろしくお願いします」

「えっと、・スバル・ナカジマです。よ、よろしく願いします」

「（ギンガとスバルだとー！？もうそんな時期なのかよ！？）」

仁は驚いていた

「初めまして、火群京子です。よろしくね、ギンガちゃん、スバルちゃん」

「俺は火群綱吉だよ。よろしくね、ギンガちゃん、スバルちゃん」

綱吉と京子が二人に挨拶をした

「ほら、仁も」

「あ、うん。火群仁だ。よろしくな二人とも。っで、俺の肩に乗ってるのが相棒のナッツだ」

「ガオ」

「「よ、よろしく願いします」」

「ギンガ、スバル、仁君は二人より年上だから、好きに呼んでいいのよ」

「えっと、じゃあ、仁兄さんって呼んでもいいですか？」

「え？か、構わないけど」

「じゃあ、私は・・・仁兄って呼んでもいい？」

「あ、ああ」

仁が照れていると

「なんだ、仁。照れてるのか？」

「て、照れてなんかないよ。ただ、兄さんって呼ばれるのが、なんか嬉しくて」

「仁君は一人っ子だもんね」

クイントが笑顔でそう言った。こうして、仁の慌ただしくも充実した一日が終わった

設定

名前 火群 仁（ほむらじん）

年齢 10歳 原作開始時は19歳

容姿 REBORNの超ツナ

魔力量 S

魔力光 オレンジ

ランク 10歳時AAA 19歳時 S+

変換資質 炎熱

レアスキル 超直感 重力操作 調和 魔力吸収

BJ シモン編で着ていた服

神に間違つて殺された少年、特典を4つ貰い、なのはの世界に転生した。性格はツナと同じである。魔法学校に通っており、勉強の方はそこそこだが、実技では年齢に似合わずトップレベルで、教師でも中々当てられないスピードを持っている

デバイス レグルス インテリジェンドデバイス AIは男性

待機状態 大空のリングと大地のリングが一つなったもの（RE
BORN参照）

起動時 ガントレッド（形状はXグローブVer．Xの形態変化
版。尚左手の甲のマークは炎真のマーク）現在はカートリッジを装
備していないが原作開始時には装備している（装着場所右手のバン
グ
ル部リボルバータイプ）

仁が神に頼んだデバイスを綱吉が渡した。仁の事を『旦那』と呼
んでいる。尚、綱吉が持っているデバイス『レオーネ』を模して造
られた兄弟機である

ナッツ 神様に頼んで得た仁の使役獣、いつも仁の肩又は頭に乗
っている。戦闘時はその姿の通り獅子のごとく相手を倒す。フリー
ドのように炎を吐いたりできないが、パワー、スピードはフリード
以上で、炎を身に纏った突進や、地面から炎の柱を出して戦う。戦
闘形態はXANXUSのベスター見たいでオレンジ色の身体でVer
．Xのようなパーツがついている

第3話

仁 side

ギンガ、スバルと出会ってから数か月後、ギンガとスバルは家にいることが多い、理由はゲンヤさん、クイントさんが共働きだからである。父さんと母さんは気にしてないが、俺が気になる。何でかつて？二人とも俺にべったりだからだよ

「ギンガ、スバル、そろそろ離れてくれないか？訓練したいんだけど」

「いやだ」

こんな感じである

「はあ〜」

『ため息ばっかついてると、幸運が逃げちまうぜ旦那』

「それより、クイントさん来るの遅くねえか？何時もなら、この時間帯に迎えに来るはずなんだが」

「クイントさんは欠かせない任務があるから、迎えに来れないって。ゲンヤさんも同じこと言ってたわ」

「……欠かせない任務ねえ。……………っ！あああああ
！？」

俺は母さんに言われてあることを思い出した

「仁兄、どうしたの？」

「いや、な、何でもないぞ（しまったー、今日はゼスト隊が壊滅
しちまう日じゃねえか。どうしよー！？……………そうだ！！）
」

「ナッツ、散歩にでも行かないか？」

「ガウ」

「っと、いう訳でナッツの散歩に連れて行くから、離してくれな
いか、ギンガ、スバル」

「私も仁兄と行きたい」

「わ、私も」

「（ここでこうきたか）だめだ、もしかしたら、ゲンヤさんが来
るかもしれないだろう？だから、二人は此処にいるんだ」

「「ぶう」

そう言い、ギンガとスバルは俺の腕を離した

「じゃあ、母さん行ってきまーす」

「あんまり遠くにいつちやだめよ」

「うん」

家を出た俺は、ナッツを肩に乗せて、全速力で走った

『旦那、一体どうしたんだよ!?!』

レグルスが俺に聞いてきた

「俺の感が言ってるんだ、クイントさんが危ないってな。ナッツ、クイントさんの居場所解るか?」

「ガオ!!」

ナッツは普段の顔つきではなく、戦闘状態の表情に変わっていた

「よし、行くぞ、レグルス!!」

『合点承知。装着!!』

俺はBJを纏い、夜の街を駆けた

仁 side end

3人称 side

「はあ、はあ」

クイントは、傷ついた体に鞭を打って走り続けた。極秘の任務、未知の敵との遭遇、仲間はクイントを逃がし、『家族の為に生きる』と言った。クイントは仲間を助ける為に走り続けた。だが、

「見つけたぞ、生き残りだな」

襲撃者の一人に追いつかれてしまった

「あそこに入った以上、貴様にはここで死んでもらう！」

「（ごめんなさい、あなた、ギンガ、スバル）」

クイントは此処までだと思い、目を閉じた

「死ね！！」

襲撃者がクイントに止めを刺そうとしたとき、妙な感覚になった

「な、何だ？か、体が重い？」

そして、目の前に居たクイントが何かに引き寄せられた

襲撃者はそれを目で追うと、クイントを抱えた仁がそこにいた

「ギリギリ、セーフってどこか？」

『そうみたいっすね』

「ガウ」

「……ナッツ、お前の力を解放する。クイントさんを病院に連れて行ってくれ」

「ガオー!!」

仁の足元に魔法陣が展開された

「獣王……召喚!!」

仁がそう唱えると、ナッツがオレンジ色の球体に包まれ、球体からはじけると、力を解放したナッツがいた

「ガアアアアア!!」

仁はクイントさんをナッツの背中に乗せると、ナッツはその場を離れた

「さて、初めての实战だが……行けるよな、レグルス？」

『勿論でつさ旦那』

「貴様、何者だ!!」

「殺し屋に名乗る名前は持ってねえよ」

「まあ、いい。死ね!!」

襲撃者は腕に着いたブレードで仁に攻撃してきた。仁はそれをしやがんで避け、

「はあっ!!」

全身のばね回転そして、炎噴射を利用してのサマーソルトキックを繰り出した

「があっ!!」

それを喰らい、襲撃者の身体が宙に浮いた、仁はすかさず、体を回転させ

「おらあっ!!」

後ろ回し蹴りを放ち、襲撃者を蹴り飛ばした

「後は、逃げるが勝ち」

仁は襲撃者を蹴り飛ばした後、その場から逃げた

「すまねえな、仁。お蔭で助かったぜ」

「気にしないでください。ナッツとの散歩の最中に偶々発見できたので良かったです。それで、容態は？」

「酷くやられたみたいだが、一応峠は越したらしい。後は本人のしだいだそうだ」

「そうですか」

その後、ゲンヤは部隊に戻り、ギンガとスバルは京子と一緒に病院に残った。そして、深夜

「やっぱり来たか」

仁は病院の前におり、目の前には大量の機械の軍団がいた

『そりゃあまあ、口封じの為に来るってもんでしょう。旦那』

「それもそうだな」

『でも大丈夫なんですか？親方に連絡しないで？』

「父さんは執務管の仕事で忙しいからな。それに、念のために力を解放したナッツを置いてきた、大丈夫さ。それより、行くぞ！」

『了解！装着！！』

仁はBJを纏った。そして、左手を前に出し

「潰れる!!」

機械の軍団のいる空間の重力を倍にし、軍団の半分を押し潰した

『容赦ねえな、旦那。結界を張ってあるからいいものの、張ってなかったら、大騒ぎだぜ』

「知り合いの命が狙われてるんだ。そんな状態で冷静でいられるほど、人間出来てねえよ」

そう言うのと、仁は右手を前に出し、左手を右腕に添えると、魔力球を形成した

『魔力充填100%』

「フレイム・・・バスター!!」

オレンジ色の砲撃が残っていた機械の軍団を全て包み、砲撃がやむと、すべてが焼き尽くされていた

「・・・ふう」

仁は息を吐いた

「レグルス、少し休む。もし、第2陣が来たら起こしてくれ」

『うつす』

そう言うのと、仁は病院のソファに寝っころがり、眠った。クイン

トが意識を取り戻したのはそれから三日後であつた

第4話

仁 side

クイントさんの部隊が壊滅してから5年、クイントさんは管路局を辞めて、主婦として生活している。まあ、たまにゲンヤさんの手伝いをしているが。俺は小学校を卒業と同時に管理局に入り、現在は108部隊に勤めている

「仁さん、この間の書類のチェックをお願いします」

「ちょっと、今忙しいからな。ハヤト」

「何ですか、仁さん？」

「今、手が離せなくてな書類のチェックを頼めるか」

「解りました」

今、俺が話しかけたのは、ハヤト・ゴクデラ。名前で解るかもしれないがREBORNの獄寺隼人にそっくりである。いや、寧ろ本人。学校にいたところからの付き合いで、俺の事を慕ってくれている。まあ、俺も信用してるんだけどな

「それにしても、部隊長はどこに行ったんだ？知ってるか、仁？」

今、俺に話しかけてきたのは、タケシ・ヤマモト。同じく、学校にいたところからの親友である。勿論、REBORNの山本と瓜二つである

「ゲンヤさんならギンガとスバルを迎えに行った」

「へえ、そついや、仁は二人と知り合いなんだっけ？」

「まあな、小さいころから一緒に遊んでいたし、妹分みたいなもんさ」

俺が書類を書き終えると、携帯が鳴った

「もしもし？」

『仁、ゲンヤだ』

「ゲンヤさん、ギンガ達と合流できたんですか？」

『それが、ギンガ達がつく空港で火災が起きちまってな、それどころじゃねえんだ!!』

「何だつて!？」

ゲンヤさんの話を聞いた俺は、立ち上がりながら叫んだ

『人手が足りなくてな、何人が連れてこっちに来れるか?』

「ええ、直ぐ行きます」

俺は携帯を切った

「仁さん、どうしたんですか？」

「どうかしたのか、仁？」

ハヤトとタケシが俺に聞いてきた

「空港で原因不明の火災が発生した。ハヤト、タケシ、一緒に来てくれるか？」

「勿論です」

「ああ」

俺と、タケシはハヤトの転移魔法で空港に転移した

「ゲンヤさん」

「部隊長」

「オッチャン」

「おお、仁、ハヤト、タケシ」

空港に着いた俺達はゲンヤさんを見つけ、状況を確認すると、俺はハヤトとタケシに言った

「ハヤトは俺と一緒に救助活動、タケシは消化の方を手伝ってく

れ。救助が終わり次第、俺も消化を開始する」

「はい」

「おう」

「行くぞ!!」

俺達はBJを纏い、行動を開始した

仁 s i d e e n d

3人称 s i d e

「お父さん・・・お母さん・・・お姉ちゃん・・・助けて。誰か助けて」

火が周りを覆っている中、スバルは一人泣きながら歩き、助けを呼んでいた

「良かった、無事みたいだね。助けに来たよ」

そこに現れたのは、本局のエースオブエースと呼ばれている高町

なのはだった

「よく頑張ったね。大丈夫、安全な場所まで一直線だから」

なのはは愛機『レイジングハート』を構え、砲撃体制に入ったが、突如目の前の石像が壊れ、倒れてきた。プロテクションを張るとしたが、間に合わない判断したなのははスバルの所に向かい、スバルを庇い、目を瞑った。その瞬間、何かに引き寄せられる感覚を覚えた。そして、遠くから何かが壊れた音が聞こえ、ゆっくりと目を開けると

「ふう〜、ギリギリ間に合ったか」

そこには、なのは、スバルを抱えていた仁がいた。仁は二人を地面に降ろすと

「仁兄!!」

スバルが仁に抱きついてきた

「大丈夫だったか、スバル？」

「うん!」

「あ、あの」

なのはが仁に声を掛けようとしたが

「礼なら後にしてくれ。今は救助活動が先だ」

「は、はい」

仁にそう言われ、なのははお礼を言うのを辞めた

「レグルス、行けそうか？」

『無理だな、旦那の砲撃の射程距離は中。ここから地上までかなり距離が離れている。アレを使えば余裕なんすつけど。そんな時間は無いでしょう？』

「……………そうだな。その君」

仁はなのはに声をかけた

「は、はい」

「君は接近戦型？それとも砲撃型？」

「砲撃型です」

「なら、プロテクションを張るから、君の魔法で地上までのルートを作ってくれ。その後、スバルを連れてここから連れて行ってくれ」

「あ、あなたは？」

「もう一人の妹分を探さないといけないからな」

「……………仁兄」

スバルが心配そうな表情で仁を見た

「大丈夫、ギンガもからず見つける。約束だ」

「……うん」

スバルは笑顔で答えた

「うっし、やってくれ」

「はい」

なのはは再びレイジングハートを構え、魔力球を形成し、そして

「デイベーン……バスター!!」

地上に向かって砲撃を放った。ルートが出来上がると、なのははスバルを連れて、地上に向かった

「俺も行くか」

仁は宙に飛び、再び救助活動を開始した

仁がギンガを探し始めて数分後

『旦那、嬢ちゃんの魔力反応を感知』

「場所は？」

『ここから、西南の方向距離は2kmってところだ』

「あいよ」

仁が指定された場所に着くと、ギンガを抱えた金髪の少女、フェイト・T・ハラウンがいた

「ギンガ！」

仁はギンガに声をかけた

「仁兄さん！！」

仁の声に気づき、ギンガも仁に声をかけた

「無事だったか？」

「うん。でも、スバルが」

「安心しろ、スバルならもう救助した」

「本当！？」

「ああ」

「えっと、そろそろいいですか？」

「うん？ああ、すまん、すまん」

フェイトに言われ、仁は気が付き誤った

「ギンガを助けてくれてありがとう……っ！危ねえ」

仁は礼を言おうとしたが、巨大な破片が落ちてき、仁はフェイトを抱え、その場から離れた

「大丈夫だったか？」

「は、はい／＼／」

フェイトは顔を紅くして答えた、理由は俗にいうお姫様抱っこをされているからである

『旦那も罪な男だね』

「何がだ？」

『いや、なんでも』

その時、タケシから連絡が入った

『仁、聞こえるか？』

「タケシ、そっちはどうだ？」

『火は順調に消えていつてるんだが、人手が足りねえんだ。こっちを手伝ってくれねえか？』

「解った」

仁は通信を切ると、フェイトを離れた

「俺は消化の手伝いに行くから、ギンガをよろしく頼む」

「は、はい」

「じゃあな、ギンガ。後で会おうぜ」

そう言い、仁は消化作業に向かった

その頃、外では

「八神一尉、指定ブロックの避難が完了しました」

「お願いします」

「はい」

騎士甲冑をきた少女、八神はやては避難完了の報告を受けると、魔法陣を展開し、詠唱に入った

「来よ、氷結の息吹、アーテム・デス・アイセス！！」

はやては魔法を発動し、火をそのブロックの火を消したが、他のブロックの消化はまだ、終わっていなかった

「人手が足りへん。これじゃ、間にあわへん」

はやてがそう言う

「大丈夫だつて」

その場に来た、タケシが言った

「もうすぐ、俺のボスが来るからな」

「それって、どういう意味ですか？」

タケシの言葉を聞いて不思議に思ったはやては、タケシに聞くと

「タケシ」

仁が現場に到着した

「仁、随分と早いな」

「救助は殆ど終わっていたからな。それより、残りのブロックは？」

「後は、あそこ一帯だけだ。避難は完了してあるぜ」

「そうか。そんじゃ、行きますか」

そう言う

「ちょっと、火の中に飛び込むなんて危ないですよ!？」

慌てたはやては直ぐに追いかけてようとしたが

「近づく、巻き添えを喰うから動かない方がいいぞ」

「っえ？」

「まあ、見てろって」

残りの消化ブロックに着いた仁は地面に降りて、魔法陣を展開した。その魔法陣は仁を中心とした半径5kmまで展開されていた

「レグルス」

『了解、カートリッジロード』

バングルから2発のカートリッジがロードされ、魔力が充填された

「いくぜ、零地点突破の極み!！」

そして、半径5kmの地点全ての炎が、一瞬で氷結した。よく見ると、氷柱もいくつか出来ている

「砕ける」

仁が氷を叩くと、全ての氷が砕け、火は完全に消化されていた

「す、すごい」

遠くからその光景を見ていたはやては驚愕した。一人で、しかもたった一発で残りのブロックの火を消化したからである

「後は、事後処理だけだな。ま、そこらへんはオツチャンがやってくれるし。俺はハヤトと合流するか」

そう言い、タケシはその場から離れた

「私とそんなに年齢が離れてないのにこの力……凄いというか言いようがあらへんな」

はやては暫くその場で仁が消化させたブロックを見ていた。彼女がその場を離れたのは、それから暫くしてからである。因みに仁はギンガとスバルに抱きつかれ、動けなかったのはお約束である

第5話

仁 s i d e

空港火災の事件から4年。あの時の真相は解明できず、ゼスト隊の壊滅と同様、真相は闇の中である。ギンガは、数年前に管理局に入隊し、現在は108部隊に所属している。スバルはあの日、俺ともう一人の魔道士みたいに、誰かを助けられるようになって言い、訓練学校に入った。まあ、休日の日は家につーか、俺の所に来、甘えている。アイツの親じゃないが、育て方間違えたか？

「……………暇だな、レグルス」

『まあ、やることないですからね』

今日は休みでのんびりしようと思ったが、暇過ぎて退屈である

『旦那、街にでも行ってナンパでもすればいいんじゃないんですか？』

「アホ、断れるのがおちだ。それに、俺はそんなにかつこよくないからな」

『…………この鈍さは親方に似たんですかね』

現在の仁の容姿はボンゴレ？世そのもので、本局、地上本部でかなり人気がある。そして、彼氏にしたい男子局員つでぶっちぎりの一位である。雑誌などで書かれているが、ギンガが全て抹消しているので本人は知らない by 作者

その時

「兄さん！」

居間のドアが開き、ギンガが入ってきた

「ギンガ、どうした？」

「一緒に街に行こうー！」

「・・・何で？」

「だって、暇なんでしょう？」

「そりゆあ、確かに暇だが」

「じゃあ、レッツゴー」

「人の話は最後まで聞けー！！」

ギンガは俺の腕を引っ張っていった

仁 side end

3人称 side

「まったく、強引に連れてきやがって」

仁はバイクから降り、ギンガにそう言った

「まあ、まあ」

ギンガは仁にヘルメットを渡してそう言った

「つで、どこに行くんだ？」

仁が聞くと

「もうそろそろ、来ると思っただけど」

「来る？誰が？」

「ギン姉〜」

遠くから聞きなれた声が聞こえた、声のする方に向くと、遠くからスバルが走ってきた

「スバル〜」

ギンガは手を振っていた

「あつ！仁兄だ！！仁兄～～」

スバルは仁がいることに気づき、仁に向かって走ってき、そして抱きついてきた

「おっと。ったく、相変わらずだなスバル。元気そうで安心したぜ」

仁はスバルの頭を撫でながら言った

「えへへへ」

スバルが笑っていると

「ちょっと、スバル。久しぶりにギンガさんに会ったからって、先に行かないでよ。私はあんたみたいに体力が有り余ってるわけじゃないのよ」

オレンジ色のツインテールをした女の子が来、スバルに言った

「ごめん、ティア。ギン姉にも久しぶりに会っけど、仁兄はもっと久しぶりだから嬉しくて」

「スバル、この子は？」

仁はスバルに聞いた

「仁兄は会うのが初めてだったね。この子はティア、私の訓練校からのパートナーだよ」

「初めまして、ティアナ・ランスターです」

「火群仁だ。ギンガとスバルの兄貴分だよろしく頼む」

仁は笑ってティアナに挨拶した

「は、はい。よろしくお願いします／＼（か、カッコいい）」

「（仁兄さん／兄がまたフラグを立てた）」

ギンガとスバルは同じことを瞬時に心の中で言った

「つで、どこに行くんだ？」

「此処に行く予定なんだよ」

スバルはバックの中からチラシを出し、仁に見せた

「何々、本日限定、〇〇〇ホテルのケーキバイキング。おひとり様、〇〇円で食べ放題」

「これは、スバルとティアのＢランク魔道士合格試験のお祝いも兼ねてるの」

「そう言えば、受けるって言ってたな。ちゃんと、受かったみたいだな」

「うん。ちょっと、問題もあったけど・・・合格できたよ」

「じゃあ、スバルとティアナの分は俺が払ってやるよ。合格祝い
にな」

仁が二人にそう言った

「本当！やったー！！」

「あ、ありがとうございます」

「気にするな」

「仁兄さん、私は？」

ギンガが仁に聞いてきた

「お前は自分で払え」

「えゝ、ケチ！」

「所で、のんびりしてていいのか？ケーキ無くなるかもしれないぞ？」

仁がそう言うと、ギンガとスバルは慌てて、ホテルに向かった。
仁とティアナはゆっくりと、二人を追った

「・・・いつも思うが。これだけ食べて何で太らないんだ？クイントさんもそうだし」

ホテルに着いた仁たちはケーキを選び、席に着くとのんびり食べ始めた。スバルとギンガに至っては、皿に載せれるだけ載せていた

「これが、二人の欠点だよな。いつまでもその調子だと、彼氏で
きないぞ」

仁がそう言うと

「「仁さん／兄がいるから、彼氏なんていない」」

二人は見事にシンクロして言った

「ったく、俺のどこがいいんだか」

「「全部」」

ケーキを食べ終えた仁たちは、街で買い物始めた。まあ、殆どがウインドウショッピングだったが。仁がベンチでのんびり待っている

「ほ、火群さん、隣いいですか？」

ティアナがそう聞いてきた

「いいぞ」

ティアナは仁の隣に座った。両者の間に沈黙が走った

「ティアナ、お前から見てスバルはどんな感じだ？」

仁が聞いた

「そうですね、馬鹿で、大食いで、突進思考の子ですね」

「はは、お前もそう思うか」

「でも、優しくて、夢に向かって一直線に頑張っている。そして、才能がある、私とは違って」

「お前はもしかして、自分に才能が無いと思ってるのか？」

「……はい」

ゆっくりとティアナが答えた

「ふむ……、レグルス、Bランク試験の映像確保できるか、5分で」

『っへ、1分もあれば余裕だぜ、旦那』

「じゃあ。頼むは」

『あいよ』

「えっと、何をしてるんですか？」

仁の会話に疑問を感じたティアナが仁に聞いた

「直ぐに解る」

それから、1分後

『旦那、入手できたぜ』

「じゃあ、スバルとティアナの試験の映像を再生してくれ」

『了解』

そして、ディスプレイが展開され、試験の映像が流れた。仁はそれを、無言で見始め、ティアナはどうしたらいいかわからず、おろおろしていた

「成程ね。ティアナ、君は自分に才能が無いって言ってるけど、いいところ一杯あるぞ」

「え？」

「まずは、指揮能力。その歳で瞬時に作戦を立てれること。そして、周りをよく見てることだ。次に、射撃能力。まだ少し粗いかなりのいい腕だぞ。最後に、幻影。その歳でここまで完璧な幻影はそうそうできない」

「でも、それだけです。私は接近戦が苦手だし、魔力だってそんなに」

「Nobody's Perfect・・・全てにおいて完璧な人間なんていないさ。俺だってそうだ」

「火群さんもですか？」

「遠距離用の技が少ないこと、防御力が少ないこと等な。それに、最初から強かったわけじゃない。日々の努力で得たものだ。だから、あまり焦る必要はないぜ、ゆつくりと、歩く速さで強くなっていけばいいんだ。焦って、体に無理させて訓練しても得るものは何もないからな」

そう言い、仁はティアナの頭に手を置き、撫でた

「自分に自信をもて。まだ、粗削りだが、お前も、スバルも強い」

「・・・はい」

ティアナは笑って答えた

「ようやく、自然に笑ったな」

「え？」

「あつた時から、緊張してたみたいだからな。やっぱ、女の子には笑顔が一番似合うからな」

そう言い、仁は笑った

「・・・／／／」

ティアナは仁の笑顔を見てまた、顔を赤くした

「ああ、仁兄、ズルい。私の頭も撫でてよ」

その時、スバルとギンガが戻ってき、そう言った

「まったく、お前は幾つになっても変わらないな」

仁はそう言い、スバルの頭を撫でた

そして、夕方になり、仁とギンガはスバル、ティアナと別れた

それから、数か月後

「今日も平和だな」

108部隊のオフィスで仁がお茶を飲みながら言った

「仁さん達のおかげで、地上の犯罪率もだいぶ減ってきましたからね」

近くにいた隊員が仁にそう言った

「仁さん、部隊長が呼んでましたよ」

ハヤトが仁にそう言った

「ゲンヤさんが？……呼ばれるようなことをした記憶はない

が・・・まあいいか、サンキュー、ハヤト」

仁はハヤトに礼を言い、部隊長室に向かった

「ゲンヤさん、仁です」

「入っていいぞ」

「失礼します」

仁が部屋に入ると、ゲンヤさんの他にギンガもいた

「何だギンガ、お前も呼ばれてたのか」

「うん」

「取りあえず、二人とも座れ」

ゲンヤがそう言い、二人は椅子に座った

「それで、ゲンヤさん、俺達に何の用ですか？」

「二人とも、機動六課って知ってるか？」

「ええ、確か新設される部隊ですよね？」

「ああ。実はお前等二人にその部隊に行って貰いてえんだ」

「俺達がですか？」

「ああ。その部隊長は俺の教え子でな、何でも、指揮官の資格を持った奴とそれともう一人FW部隊に入ってもらいたいんだと。仁、お前、確か指揮官の資格持ってたよな？」

「ええ、一応持ってますが」

ゲンヤに言われ、仁は答えた

「でも、俺とギンガが抜けて大丈夫なんですか？戦力が落ちますよ」

「なあに、此処にはS+の魔道士が後二人いるんだ、問題ない。それに、二人にとってもいいことだと思うぞ。仁は自分の部隊を立ち上げるときの参考になるし、ギンガは今より、もっと強くなれる」

「まあ、俺にとってはそうですけど、ギンガが強くなれるかは解りませんよ？」

「まあ、これを見る」

ゲンヤは二人の機動六課のメンバー表を見せた

「部隊長が八神はやて。俺と同じ歳で階級は二佐か。うんで、教導管が若手随一の教導管高町なのは。捜査官にフェイト・T・ハラオウン執務管ねえ。他にもニアSの騎士が二人、戦力としては充分だと思っんですがね」

「フェイトさんがいるんだ」

「っで、どうだ？」

「……いいですよ」

「私も行きたいです」

「決まりだな。八神の方には俺から連絡しておく。二人は準備を始めくれ」

「「はい」」

こうして、仁とギンガの六課移動の件が決まった

第6話

仁 s i d e

仕事の引継ぎが完了した俺とギンガは荷物を車に入れて、機動六課に向かっている

「嬉しそうだな、ギンガ。スバルと一緒に働けるのがそんなに楽しみなのか？」

「うん。それに、もっと強くなれるかもしれないから」

「・・・そうか」

そして、機動六課に到着した俺達は

「でかいな、うちの倍はあるぞ」

俺はその大きさを見て驚いた。金の使い過ぎだろう

「取りあえず、中に入って部隊長室に向かうぞ」

「はい」

俺は中に入り、ギンガも後に続いた。受付で部隊室の場所を聞い

た俺とギンガはそこに向かった

仁 side

3人称 side

「それで、話って何、はやてちゃん？」

六課の前衛部隊の隊長の一人なのはがはやてに聞いた

「実はな、今日から六課に異動してくる局員が二人おるんや」

「二人も！？」

なのはの隣にいたもう一人の隊長、フェイトが驚いた

「せや、前に勤めていた所は陸士108部隊。私の尊敬するゲンヤさんの所や」

「確か、108部隊ってランクS+の人が7人いるんだっけ？」

はやての言葉を聞いて、なのはが質問した

「せや、そのうちの一人と、Aランクの人が一人来る予定や」

「どんな人なんだろう？」

「はやてが知ってる人？」

「一人は知つとるけど、S+の人は知らへん。108部隊にいたときも会ってないんや」

「そうなの？」

「うん」

その時、ドアが叩かれ

「出向してきたものだが」

「どうぞ」

「失礼します」

はやての許可が下りたので、仁とギンガは部屋に入った

「108部隊から来ました、火群仁一等陸尉です」

「同じく、ギンガ。ナカジマ陸曹です」

「「よろしく願います」」

仁とギンガは挨拶をし、敬礼をした

「ようこそ。私が機動六課の部隊長、八神はやてです」

「高町なのは一等空尉です」

「フェイト・T・ハラOWN執務管です」

「……よろしくお願いします」

「つと、硬い挨拶は此処までにして、久しぶりやなギンガ」

「はい、はやてさん。フェイトさんもお久しぶりです」

はやてとギンガは普通に喋り、ギンガはフェイトに挨拶をした

「うん、そうだね」

「所で、火群陸尉にお聞きしたいことがあるんですが」

はやてが仁に言った

「聞きたいこと？」

「はい、4年前の空港火災事件でたすけてくれたのは」

「ああ、俺だ。そう言えば、どこかで見たことある顔だとは思ってたが、そう言うことか」

「あ、あの。あの時は助けに来てありがとうございます」

なのはが仁にお辞儀をした

「私も、ありがとうございます」

フェイトも仁にお辞儀をした

「あの時出来ることをやったままでさそれより、二人ともあの時は悪かったな、あんな持ち方して」

「「い、いえ、気にしてません／＼（本当は嬉しさ半分、恥ずかしさ半分だったけど）」」

「（一体どんな持ち方をしたんや？ものすっごい気になる）」

二人の表所を見てはやてはそう心の中で思った

「今から、二人の事を紹介するからホールに行くで」

仁とギンガははやて達の後ろを歩き、ホールに向かった

「ホール」

「え、今日は皆に新しく来た、局員を紹介したいと思います。
二人とも前へ」

はやてに言われ、仁とギンガは前にでた

「陸士108部隊から来た、火群仁一等陸尉です、よろしく」

「同じく、ギンガ。ナカジマ陸曹です、よろしくお願いします」

仁とギンガは六課のメンバーに挨拶をした

「火群一等陸尉には遊撃隊であると同時に現場での指揮を執ってもらいたいと思います。ナカジマ陸曹はライトニング部隊に所属してもらいます」

そして、紹介が終わり、他の局員は仕事に戻った

「仁兄〜」

ホールに隊長陣、FW陣以外の局員がいなくなると、スバルが仁に抱きついた

「数か月ぶりだな、スバル。元気にしてたか？」

仁はスバルの頭を撫でながら聞いた。後ろでは隊長陣が羨ましそうに見ていた

「うん」

「そうか、ティアナも元気だったか？」

「はい。お久しぶりです仁さん」

「じゃあ、軽い自己紹介をしようか。スバルとティアナ、私とフエイトちゃん、はやてちゃんは知ってるからそれ以外だね」

なのはがそう言い

「じゃあ、あたしからだな。機動六課、前衛部隊スターズ隊の副隊長ヴィータだ」

「同じく、前衛部隊ライトニングの副隊長シグナムだ」

「ライトニング3、エリオ・モンディアル三等陸士です」

「同じくライトニング4、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。この子はフリードっていいいます」

「キユクー」

「はやてちゃんの補佐のリインフォース・ツヴァイ曹長です」

「よろしくな。知ってのとおり火群仁だ。肩に乗ってるのは相棒のナッツだ。まあ、気軽に仁って呼んでくれ」

「さてと、自己紹介も終わったし、訓練を始めようか。ギンガもいける？」

「はい」

なのはに言われギンガは返事をした

「じゃあ、行こうか」

なのはとFW陣は訓練場に向かった。仁はどんな訓練をするのか

に興味^が湧き、着いて行^{った}た

第7話

仁 side

F W達の練習を見る為に、俺はなのについて訓練場に来ていた
「しかし驚いたな。まさか、こんなシステムが開発されていたとは」

俺は訓練場を見たときは驚いた。何せなにも無い所からビルが出てきたからである

「にやはは、あの時の仁君の顔凄かったもんね」

「うちの部隊にはこんな高いものは無いからな。俺達から言えばこの部隊は異常なんだよ」

なのはが苦笑いで言った後、俺は思っていたことを正直に言った

「それにしても、スバルは相変わらずの突進か・・・まったく、少しは頭を使えっての」

『旦那、それは無理だと思うぞ?』

「・・・何故か納得してしまう自分が此処にいる」

そして、FW達の訓練が終わり、全員が戻ってきた。ギンガはそこまで疲れてなさそうだが、他の4人はくたくただった

「情けないわよ、スバル。このぐらいの訓練でへばるなんて」

ギンガがスバルに言った

「どうして、ギン姉は平気なの？あたし達と同じ量をやったのに」

「そりゃあ、仁兄さんに鍛えてもらってるもの。当然でしょう」

「じゃあ、今度は仁君にやって貰おうかな」

「っは！？」

なのはに言われ、俺は驚いた

「いや、何で俺が？」

「皆にお手本を見せてもらいたいんだけど、だめかな？」

「……別にいいか。体を動かしたい気分だし」

俺はそう言い、柔軟を始めた

「皆、仁君がこれから皆と同じ訓練をやるから、しっかり見てるんだよ」

「はい！..」

なのはの言葉に全員が返事をした

「そんじゃあ、行くぞレグルス」

『あいよ』

「セットアップ!!」

『装着』

俺はレグルスを起動させ、BJを纏った

「あれ？仁兄、BJのイメージ変えたの？」

「まあな」

現在、仁が着ている服は碧の軌跡、ワジの服装（星杯騎士）で色はオレンジである

「そんじゃあ、行くぜ!!」

俺は訓練場に向かった

仁 side end

3人称 side

「シャーリー、ガジェットの数は10機。レベルはAに設定して」

「はい」

なのははシャーリーに言った

「GINGA、仁はどんな戦闘スタイルなの？」

いつの間にか来ていたフェイトがGINGAに聞いた

「仁兄さんの戦闘スタイルは、超高速近接格闘です」

「じゃあ、フェイトさんと同じなんですね」

GINGAの説明を聞いてエリオがそう言った

「ううん、仁兄さんのスピードはフェイトさん以上。もし、兄さんのスピードに着いて行けるとしたら、それは仁兄さんのお父さん綱吉さんしかないわ」

「ほう、テストロッサ以上のスピードか」

シグナムは感心していた

「仁君、用意はいい？」

『ああ、いつでもいいぞ』

なのはに言われ、仁は返事をした

く訓練場く

『じゃあ、レディ……ゴー!!』

なのはのスタートの合図と同時に、仁はカウンターバーナーから魔力を噴射し、一瞬でガジェットとの距離を詰めた

「はあっ!!」

そして、魔力を付与した、拳、手刀、蹴りでガジェット10体を瞬殺した。その時間は僅か2秒

く観戦スペースく

「っえ？」

ディスプレイで仁の戦闘を見ていたギンガとスバル以外のメンバ―は驚いた。何故なら、仁が消えたと思ったら、全てのガジェットが爆発し、そして仁が姿を現したからである

「な、何が起こったんや!？」

仁の実力を知りたかったはやはりその光景を見て驚いていた

「シャーリー、今の映像取ってある？」

「い、いえ、取る前に終わってしまったので」

「つぶ、なら、此処は私が・・・」

「私が行くから、シャーリーは映像を取る準備をしておいて」

「テ、テストロッサ!？」

シグナムが仁と模擬戦をしようと言う前に、フェイトが自分ができるといい、前に出た

「行こう、バルディッシュ」

『yes sir』

フェイトはBJを展開し、訓練場に飛び立った

「訓練フィールド」

「こんなもんか」

仁は腕を回しながら言った

『旦那、どうやらまだ終わりじゃないみたいだぜ?』

「はあ?」

仁が首を傾げていると

「仁、今度は私と戦ってもらおうよ」

フェイトがき、そう言った

「……何で?」

仁が聞くと

「私もスピードには自信があるんだ。だから、どっちが上か確かめたい」

「あゝ、成程ね」

そう言い、仁は拳を構えた

「なら、……本気で来い。じゃないと、直ぐに……終わるぜ?」

そして、仁の姿が消えた

『protection』

バルディッシュがバリアをフェイトの後ろに張った瞬間、仁の拳

がバリアにヒットした

「…………その相棒に感謝するんだな。バリアを張ってくれなかったら、今で終わってたぜ」

仁は直ぐにその場を離れた

「…………早い、まったく見えなかった」BD、カートリッジロード！」

『lord cartridge ハーケンフォーム』

フェイトはBDを大鎌に変えた

『Sonic move』

そして、仁の後ろに移動した

「……………」

仁はその場から動かないでフェイトの攻撃を防いだ

「そ、そんな」

「鎌を使う物の必勝パターンは後ろからの攻撃だからな。まあ、それなりに早いけど……父さん程じゃねえな」

仁は一瞬でフェイトの背後に移動し

「はあっ！」

後ろから掌底を叩き込み、フェイトを吹き飛ばすと、

「Xカノン!!」

巨大な炎の弾丸を右掌から撃ち出した

「つく!!」

『Sonic move』

BDがソニックムーブを発動し、仁の攻撃をかわした。つが

「……遅い」

すでに仁はフェイトの後ろに移動しており、掌をフェイトに向けていた

「X……カノン!!」

そして、ゼロ距離から炎の弾丸を放った

「きゃああああ」

フェイトはそれを受け気絶し、地面に向かって落ちていった。そして、その途中でフェイトの落下地点に回り込んでいた仁がフェイトを受け止めた

「よつと。少し加減を間違えたか？」

『いいや、旦那は最小限まで威力を落としてたぜ。嬢ちゃんが気

絶してるのはB」が他のに比べて薄いせいだろう』

「取りあえず、なのは達の所に戻るぞ。医務室に向かうのはそれからだ」

仁はフェイトを抱えたまま、皆の所に向かった

第8話

仁 side

フェイトを抱えた俺はなのは達のいる所に戻ると、エリオが俺の所にやってきた

「仁さん、凄いです。どうやってたらあんなに強くなれるんですか」

「訓練を欠かさずにやってれば強くなれる。まあ、俺の場合は師が強かったからな」

「僕も強くなれるでしょうか？」

「ああ、きつとなれる。・・・確かエリオは槍を使っていたな」

「は、はい」

「だったら覚えておけその槍を自分の身体の一部にしろ。槍を武器だとは思わず、手の延長だと思って振れ」

「えっと、良く解らないんですが？」

「まだ、難しいかな？とにかく、その槍をちゃんと扱えるように」

しな」

「は、はい」

「フェイトを医務室に連れて行きたいんだが、いいか？」

エリオとの話が終わった後、俺はなのはに聞いた

「うん、いいよ」

「……（何だ、なのは達から感じるこの黒いオーラは？）」

俺はなのは、はやて、スバル、ギンガ、ティアナから黒いオーラを感じた

「と、とにかく、練習頑張れよー」

そう言い、俺は医務室に向かった。後で聞いた話だが、その後、訓練場では大量のガジェットがなのは達（エリオ、キャロ、副隊長以外）によって壊されたらしい

仁 s i d e e n d

3人称 s i d e

「う、うゝん」

医務室のベッドに寝ていたフェイトが目を覚ました

「・・・・・・・・ここは？」

「あら、目が覚めたの」

机の上で作業をしていたシャルが気が付いた

「・・・・・・・・シャル？じゃあ、ここは医務室なの？」

「ええ、そうよ。何でフェイトちゃんが此処にいるかは、仁君と模擬戦をして負けて、気絶したフェイトちゃんを彼が此処に運んできたのよ。・・・しかも、お姫様抱っこで」

「そうなんだ。・・・・・・・・っえ？」

フェイトはシャルの言葉を聞いて首を傾げた

「シャル、今なんて言ったの？」

「だから、仁君がフェイトちゃんをお姫様抱っこで此処に運んできたのよ。びっくりしたわ」

「・・・・・・・・えええええっ！？」

フェイトは大声で叫んだ

「あら、信じられない？これが証拠よ、バルディッシュ、当然、映像取ってるんでしょ？」

『はい』

シャマルは持っていたBDにそう言い、BDは映像を表示した

「・・・・・・／／／」

フェイトはその映像を見て、顔をトマト並に真っ赤にした

「それにしても、彼かなり強いわね。スピードでフェイトちゃんに勝つ上に、高機動型の弱点、パワー不足も無いみたいね」

「うん、戦いの流れも読めていたし。何より、まだ何かを隠してるみたいだったよ」

「はあ、地上部隊最強7人衆の一人って言うのもうなずけるわね」

「最強の7人？」

フェイトが首を傾げて聞いた

「地上部隊、いいえ108部隊には最強の7人がいるの、それぞれのランクはS+以上で、尚且つたった一人で、違法魔道士30人は軽く倒せるほどの強さなの。本局も地上本部も彼らを引き抜こうとしてるんだけど、帰って来る答えはいつも、『俺達はある人の頼み以外聞く気はない』って言ってるらしいわ」

「そのある人って？」

「ええ、火群仁一等陸士よ。噂では、強引に引き抜こうとした本局に提督の一人が、再起不能間際までされたそうよ」

「……うわぁ」

「だから、彼がここに来たのは軌跡と言ってもおかしくないのよ」

フェイトはシャルルの話を聞いて、啞然としていた

「……それと、フェイトちゃん。もし、仁君を狙うんだったらかなり積極的にならないといけないわよ？ ああ見えて彼、かなり人気なのよ」

「わ、私は別に／＼／」

フェイトは顔を紅くして、言い訳したが

「その顔で言われても説得力ないわよ？」

「あう」

あえなく撃沈した

「はやてちゃんやなのはちゃんも狙ってるみたいだし。ふふふ、これから楽しくなりそうね、色んな意味で♪」

シャルルは笑ってそう言った

第9話

3人称 side

仁とギンガが機動六課に配属になってから数日が経った。現在FW部隊は訓練場で朝の訓練をしている

「じゃあ、今日の早朝訓練ラスト行くよ」

「はい!!」

「今から5分間、私の攻撃を躲すか私に一撃与えられたら訓練は終了。その代り、誰か一発でも当たったら最初からやり直しだからね」

FW達は集まって作戦会議を始めた

「この状態でなのはさんの攻撃を躲す自信ある?」

ティアナが全員に聞いた

「「「ない／＼なんです」」」

「あるわ」

「『『『え！？』』』」

スバル、エリオ、キャラは無いと言ったが。唯一ギンガだけはあると言った

「ギン姉、避けきる自信あるの！？」

「ええ、ハヤトさんの嵐の攻撃に比べたら、楽な物よ」

ギンガは自分の上司の攻撃を思い出し、顔を青ざめた

「『『『一体、どんな人なんだろう？』』』」

スバルはハヤトの事を知っているが、他の3人は知らないので首を傾げた

「と、取りあえず、なのはさんに一発入れることに集中しましょう」

そして、最後の訓練が始まった

3人称 s i d e e n d

仁 side

「よくやるな」

仁は離れた場所で訓練の様子を見ていた

「あの訓練はリンチに近いと思うのは俺だけか？」

『旦那、キヨウヤの訓練に比べれば楽だと思いますよ？』

「……そう言えば、あいつの訓練は生きるか、死ぬかだものな」

俺はキヨウヤの訓練を思い出し、汗を流した

「おお」

訓練を見ていると、キャロのブーストを受けたエリオがなのはに
一撃を叩き込み、早朝訓練は終わった

仁 side end

3人称 side

「そう言えばギンガさん、スバルさん、ティアナさんのデバイスって自分で組んだんですね？」

早朝訓練が終わり、FW陣は現在シャワーを浴びている

「うん、そうだよ」

「訓練校では杖しかなかったからね」

「私もスバルも魔法がベルカ式だったし、ティアナはカートリッジシステムを使いたいからって」

「それで、私とティアナがコンビを組まされたんだ」

「へえ、そうなんですか」

「その時から私の苦悩とスバルとの腐れ縁が始まったんだけどね」

ティアナはため息をついた

「ロビー」

「……皆、遅いな」

「キュク——」

ロビーでは女性人を待っていたエリオとフリードが退屈そうにしていた

「デバイスルーム」

「こ、これが」

「私達のデバイスですか」

5人は待機状態の自分のデバイスを見て顔を輝かせている

「設計は私となのはさん、レイジングハートさんとリイン曹長が協力してくれました」

そして、デバイスの説明を聞いていると

「ごめん、ちょっと、遅くなっちゃった」

「ははは、全員顔がにやけてるぞ」

なのはと仁が部屋に入ってきた

「仁兄！見て見て、私のデバイスだよ」

「ははは、嬉しそうだなスバル」

「うん!!」

仁がスバルと話していると

「じゃあ、午後の訓練の時に微調整をすませようか」

そう言った時、六課全体にアラームが鳴った

「このアラームは・・・」

「一級警戒態勢!?!」

「グリフィス!」

仁は直ぐにロングアーチに連絡を入れた

『仁さん、協会からの要請です』

『なのは隊長、フェイト隊長、仁機動隊長、グリフィス君、こちらはやて』

すると、はやてから連絡が入った

『教会騎士団の調査部で追ってた、レリックらしきものが見つかった。場所はエイリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレール、移動中』

「おいおい、まさか」

仁がそう言つと

『そのまさかや……。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体。大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれへん。いきなりハードな初出勤や。なのはちゃん、フェイトちゃん、仁君行けるか?』

「俺はいつでも行けるぜ」

『私はいつでも』

「私も」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガも行けるか?』

「……はい!」

『よし、いいお返事や。シフトはAの3、グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場観戦』

「はいです」

『仁君は現場での指揮を、なのはちゃん、フェイトちゃんは仁君の指示に従って行動や』

「うん」

『ほんなら、……機動六課フォワード部隊、出勤!』

「「「「「了解!」「」「」「」

「シャーリー、遠隔でいいからFW達のデバイスの微調整を
せろ」

「わ、解りました」

仁はそう言い、ヘリポートに向かった

第10話

仁 side

「ぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りやれば大丈夫だからね」

「それと、俺達もいるから気にしないで暴れてこい」

「「「「はい!!」「」「」」

へりの中で俺となのはがFW達に激をいれた

「うん？」

その時俺は、少し暗い表情をしたキャラ口に気が付いた

「（確かキャラ口は・・・）」

俺はメンバー表を見たとき、今だ自分の力を制御できないが将来性ありと書かれていたことを思い出した

「・・・・・・・・」

俺はキャラ口の近づき

「え、じ、仁さん!？」

キャラ口を抱きしめた

「大丈夫だ。お前は一人じゃない、スバルやギンガ、ティアナ、エリオ、フリードもいる。だから、怖がる必要なんてないんだぜ」

俺はキャラ口の頭を撫でながら言った

「力をコントロールするのに必要なのは、なにも魔力だけじゃない。一番必要なのは心と信頼関係だ。俺やナッツ見たいにな」

「ガウ」

俺の頭の上に乗っかっているナッツがその通りだといい、頷いた

「フリードを信じ、自分を信じる。いいな？」

「仁さん……はい!」

キャラ口は元気よく返事をした

『なのは隊長、フェイト隊長、仁機動隊長、空からガジェットが接近してきてます。数は30』

ロングアーチから連絡が入った

「どうするの仁君？」

なのはが俺に聞いた

「……フェイト、今どのあたりだ？」

『もう少ししたら、ヘリに追いつけるぐらいの距離だよ』

「……空の敵は俺とフェイトで相手をする。FWメンバーはヘリでリニアに近づき、降下しレリックの回収を。なのはリニアの防衛に徹し、危険だと思ったらFWメンバーの救援に向かってくれ」

「……はい！」「……」

「了解」

「それから、スターズ部隊にはナッツを同行させる。構わないよな、ナッツ？」

「ガウ」

ナッツが俺に返事をした

「つえ、ナッツをですか？でも……」

「あゝ、ティアは知らなかったね、ナッツの本当の姿」

ティアナの思った事を理解したスバルがそう言った

「……え？」「……」

ナッツが俺の頭から降り

「獣王……召喚!!」

俺がそう叫ぶと、ナッツが橙色の球体に包まれ、球体が無くなる
と、力を解放したナッツの姿があった

「頼んだぞ、ナッツ」

ナッツはゆっくりと頷いた

「ヴァイス、ハッチを開ける!!」

「へい!!」

ハッチが開き、俺はゆっくりと歩き出した

「じゃあ、油断せずに戦うんだぞ」

俺はそう言い、ヘリから飛び降り

「レグルス、セットアップ!!」

『装着』

BJを纏い、ガジェットの群れに向かって行った

仁 side end

3人称 side

「はあっ!!」

仁は炎を纏った拳で、次々とガジェットを破壊していった

「レグルス、ヘリはどんな状況だ？」

『もう少しで降下ポイントにつくつすよ』

「そうか。（フェイト、そっちの状況は？）」

仁はフェイトに念話を送った

「（問題ないよ、このくらいなら後少しで全機倒せる）」

「（そうか。なら、制空権をとったら、リニアの方にむかうぞ）」

「（うん）」

仁はフェイトとの念話を終えると

「Xカノン!!」

掌から大きめの炎の弾丸を放ち、ガジェットを撃ち抜いた

「リニア・上空」

「さて、新人共。隊長達のおかげで、無事降下ポイントに到着だ。きばっていけよ」

「「「「はい」」」」」

「じゃあ、仁君も言ったけど、油断しないで戦うんだよ」

「はい、スターズ03、スバル・ナカジマ」

「スターズ04、ティアナ・ランスター」

「「行きます!!」」

そう言い、スバルとティアナはヘリから飛び降りた

「行くよ、マツハキヤリバー」

「頼むわよ、クロスミラージュ」

「「セットアップ!」」

二人はデバイスを起動しBJを纏った

「次、ライトニング。気を付けろよ、ちび共。それと、ギンガ！ちゃんと守ってやるんだぞ」

「はい、ライトニング05、ギンガ・ナカジマ、行きます！！」

「ライトニング03、エリオ・モンディアル」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ・・・」

「「行きます！」「」」

「ブリッツキャリバー」

「ストラダ」

「ケリュケリオン」

「「「セットアップ！」「」」」

3人もBJを纏い、リニアに着地した

「あれ、このデザインって」

『全員のBJは隊長達のを参考にしています。癖はあるけど、性能は折り紙つきですよ』

そして、FWメンバーの戦闘が開始した

くスターズ方面く

「おおおおおっ!!」

スバルはリボルバーナックルのスピナーを回転させ、その衝撃でガジェットを倒していった

「シュート!!」

ティアナは2丁銃を扱い、ガジェットを撃ち抜いて行った

「GAOOO!!」

ナッツは炎を纏い、ガジェットに突撃し、ガジェットを粉々にしていった

くライトニング方面く

「はあああああっ!!」

ギンガはスバルと同じく、左手に装備したナックルでガジェットを倒していった

「でえええええい！！」

エリオは槍でガジェットを薙ぎ払い、斬り裂いて行った

キヤロは後方で二人の援護をおこなっていた

「ふう、あらかた倒したわね」

「そうですね」

「GINGAさん、エリオ君、大丈夫ですか？」

「ええ。それより先を急ぎましょう」

「「はい」」

3人は奥に進み、扉を開けると、巨大なガジェットが現われた

「これって・・・」

「し、新型！？」

「二人とも、一旦離れるわよ」

GINGAが二人に指示をだし、3人は外に移動した。新型のガジェットは3人を追って、外に出ると、AMFを発動させた

「っ！AMF、こんな距離まで」

ギンガは歯ぎしりをした

「このーーーーー!!」

エリオはストラダを構えて、突撃した

「エリオ、うかつに飛び込んだじゃだめよ」

ギンガがそう言ったが、既に遅くエリオはガジェットの懐に入り、ストラダを振り降ろしたが

「か、硬い」

ガジェットの装甲は厚く、エリオの攻撃は防がれてしまった。エリオがひるんでいる隙に、ガジェットはアームを伸ばし、エリオを締め上げた

「うわああああ」

「エリオ君!？」

「つく」

ギンガはエリオを助けようと巻きついていてアームに攻撃したがまったく通用しなかった。そして、アームで攻撃され、ギンガは吹き飛び、気を失ったエリオは谷に放り投げられた

「エリオ君!!」

キャラはエリオを助けようとしたが、一瞬戸惑ってしまった。力

を解放させて、制御できないと思ってしまったからである

「（どうすれば・・・）」

キャラが悩んでいると、仁の言葉が頭をよぎった

『力をコントロールするのに必要なのは、なにも魔力だけじゃない。一番必要なのは心と信頼関係だ。自分を信じ、フリードを信じる』

「っ！エリオ君！！」

キャラはエリオを助ける為にリニアから飛びおりた

『なのはさん、エリオとキャラが』

ギンガはなのはに通信を入れ、助けを頼もうと思ったが

「大丈夫だよ。あそこならAMFも届かない。出来るよフルパワーのパフォーマンスが！！」

「守りたい、優しい人…、私に笑いかけてくれる人たちを…、自分の力で…守りたい！」

キャラはエリオの手を掴むと、魔力で自分を包み、落下速度を減少させた

「フリード、不自由な思いさせててごめん。私、ちゃんと制御するから……。行くよ……。竜魂召喚！」

キャラがそう叫ぶと、魔法陣が展開された

「蒼穹を奔る白き閃光、我が翼となり、天を駆けよ！来よ、我が竜フリードリヒ！竜魂召喚！！」

フリードが魔力球に包まれ、球体が割れると、力を解放したフリードが現れた

その後は、原作通りの展開が起こり、キャラのブーストを受けたエリオが魔力刃でガジェットを斬り裂いた b y 作者

そして、仁の指示でスターズ部隊は地上本部までレリックの護衛をし、ライティング部隊は現状待機に入った。こうして、初任務は幕を閉じた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0993z/>

魔法少女リリカルなのは ～大空と大地～

2011年12月28日01時54分発行